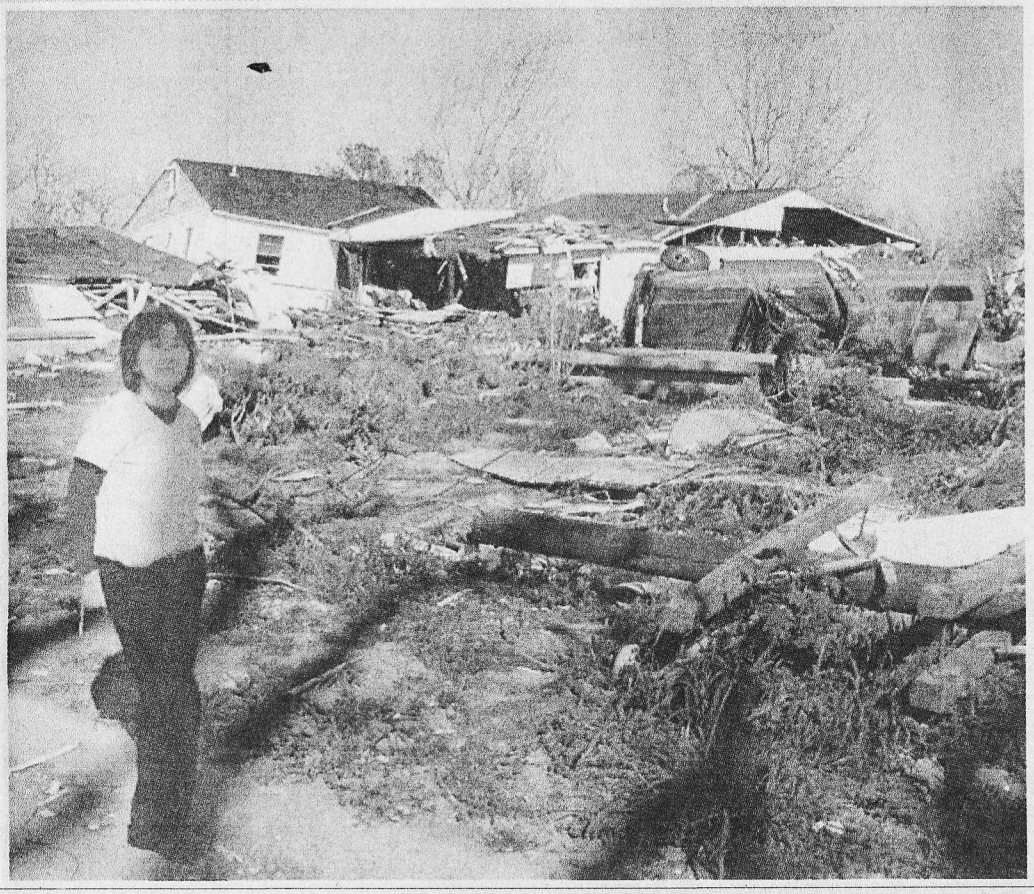
ニューオーリンズ 復興の灯を

保志門澄江さん（県出身）

AMDAで支援

ハリケーン被災の ベトナム人中心に

県出身の保志門澄江さんが昨年八月にハリケーン「カトリーナ」の直撃を受けた米国ニューオーリンズでボランティアとして復興支援活動に当たっている。保志門さんは政府からの復興支援が届きにくいベトナム移民やベトナム系アメリカ人のサポートを中心に支援活動を開始。「遠い米国でアジア人同士助け合えたことは精神的にも充実感がある」と話している。



カトリーナの被害が残るニューオーリンズ市内と保志門さん＝4日

一九八八年に琉球大学保健学部を卒業後、県内、県外の病院を経て九七年から二年半、国際協力機構（JICA）専門家としてインドネシア保健省で働いた。二〇〇三年九月からはニューオーリンズのチューレーン大学の修士課程で国際保健を学び、卒業直後の昨年八月、ハリケーンに被災した。

保志門さんは、ニューオーリンズの難民約二十四万人を受け入れたテキサス州ヒューストン市で支援活動を始めた日本の「アジア医師連絡協議会（AMDA）」に参加。避難所で聞き取り調査を行い、ベトナム系移民の窮状を知った。

ベトナム戦争後、米国へ移民した多くのベトナム人やベトナム系アメリカ人の多くは、ハリケーンの被害が特に大きかったニューオーリンズから南西メキシコ湾岸沿いの入り江や沼地に住んでいた。英語が十分に話せない人も多いため、救助関連の情報もなかなか伝わらず、避難所には支援物資やボランティアサービスが行き届きにくい状況だった。AMDAはベトナム系住民の支援を決定。義援金や生活支援物資の供給を始めた。

ニューオーリンズの一部地域に帰還許可が出ると、保志門さんらも活動の場をニューオーリンズに移した。浸水などで家具や食料品などの腐敗による環境汚染や健康への影響が懸念され、AMDAは引き続きベトナム系住民にマスクや手袋などの予防具を配布するなど支援した。